

## 泉鏡花「夜叉ヶ池」を読む —いへの表象を視座として—

羅 小 如\*

### 1. はじめに

大正二年に発表された戯曲「夜叉ヶ池」は鏡花の代表的な幻想劇とされ、傑作の一つとして数えられているものである。

そのため、「夜叉ヶ池」研究は鏡花の戯曲創作の濫觴と目される「沈鐘」との受容関係や、前「天守物語」的な位置づけから出発し、その幻想性や、超自然的な存在との関わり、または神話的な構造の解明などに、今までの考察の焦点が置かれている。しかしながら、鏡花の婚姻制度への極度の反感、華族といった身分と当時の婚姻関係の実態などを合わせて考えてみると、晃と百合の夫婦像は極めて異色なものであり、そのまま看過されるべきものではない。

上記のことを踏まえながら本稿では、鏡花自身の婚姻観と大正初期の結婚事情及び家族の成立をめぐる諸問題を視座に据えたい。晃と百合の夫婦像に着目し、当時の社会的背景がどのように「夜叉ヶ池」における幻想的な世界観を構築する土台になり得るのかということに焦点を絞り、考察を試みる。

### 2.1 「夜叉ヶ池」における零弾谷の「危機」

「夜叉ヶ池」研究史を辿ると、「幻想劇」が一つのキーワードとして浮かび上がってくる。鏡花研究の先駆者村松定孝氏（『泉鏡花研究』、昭和49年8月）は「沈鐘」の翻訳を基準として、「夜叉ヶ池」の評価を下している。それ以来、いわゆる魔

界と人間界または現世との関わりなど、つまり幻想劇ならではのこのような構造と仕組みを解明することが「夜叉ヶ池」研究の焦点となっている。例えば、笠原伸夫氏も早い時期（「天守物語の成立」、『国文学解釈と鑑賞』、昭和50年9月）に「夜叉ヶ池」、「海神別荘」そして「天守物語」など一連の戯曲を取上げ、鏡花の幻想劇の方法を考え、「夜叉ヶ池」の前「天守物語」的な位置づけを指摘している。

それに対して、杉本優氏（「泉鏡花の幻想劇——「夜叉ヶ池」の復権」、「国語と国文学」、昭和56年8月）と、近年に森井マサミ氏（「夜叉ヶ池」再読、『論集泉鏡花第五集』、和泉書院、平成23年9月）が「夜叉ヶ池」の独自の達成点に着目し、前「天守物語」といった位置づけを覆して、新たな読みを提示した。しかし、風俗劇と対立する幻想劇とされているゆえ、「夜叉ヶ池」の幻想的な側面に常に考察の焦点が置かれる傾向が引継がれている。そのため、幻想性に偏る従来の考察では依然として解消のできない疑問が残っているのが現状である。

その疑問の一つは杉本氏が指摘した「恋人たちの隠された危機」という問題である。杉本氏によると、晃が東京に戻ってしまうという百合の不安は「恋人たちの隠された危機」を示唆するものである。この恋人たちの危機がまさに「夜叉ヶ池」の喪失寸前の伝説の危うさを象徴するかのようになり、破滅的な洪水の起爆剤となるわけだが<sup>1</sup>、なぜ恋人たちに危機が生ずるのかについては検証されていない。

\* お茶の水女子大学大学院院生

それに対して、森井マズミ氏は杉本氏の「恋人たちの危機」説をうけながら、百合という人物に焦点を当てて分析を展開している。森井氏によると、百合は「伝説」の機能を持続させる役割を果たしている一方、「村人との関係に拘束されて」いて、「個人の愛を貫く」ことが出来ない両義的な存在である。その理由は、「現世の論理が魔界の論理を屈服させてしまっている」「夜叉ヶ池」というテキストの一大特徴にあるのだと森井氏が指摘している。つまり、「夜叉ヶ池」の百合と晃が、鏡花作品の類型（森井氏によると「森に棲む魔界の女と地上の人間の恋」、引用者注）からはずれていることはあきらかである。そのため、「地上」の女でしかない百合の恋情には、「現世」の論理におびやかされた、脆弱さを指摘することができるのだ。更に、森井氏はこうした現世の論理が優位であることと、「前近代的な地縁関係」が「百合の不安」すなわち「恋人たちの隠された危機」をもたらすものとして挙げた。「危機」を専ら百合の両義性によるものだとされているわけである。

しかし、「恋人たちの隠された危機」の理由を百合だけに求めることは、萩原晃という人物の存在を見逃してしまい、過小評価してしまう恐れがある。実際のところ、今までの研究において晃に焦点を当てるものはほぼ見当たらない。しかしながら、「恋人たちの危機」という「夜叉ヶ池」における起爆剤をもたらすものは、百合だけではなく晃の存在にも隠されているといえるはずである。

そもそもなぜ百合は晃と一緒に東京に戻る選択肢がないのか、つまりなぜ「晃が東京に戻ってしまう」ことが「恋人たちの危機」になり得るのか、その答えとしては、晃のただならぬ出身が想定できる。萩原晃が、「華胄の公子、三男ではあるが、伯爵の萩原」という家柄である。いわゆる起爆剤を作り上げた根本的なものは、まさにこのような晃と孤児百合の結びにあるようにいえる。

以下に、「恋人たちの隠された危機」の内実とは何物なのかについて、萩原晃という人物及び晃と

百合二人の夫婦関係の異色さに焦点を当てながら、考察を試みる。

## 2.2 談話「愛と婚姻」をめぐる

晃と百合は、「夜叉ヶ池」の冒頭のところから、結末の白雪の言葉まで、一貫して夫婦として描かれているように見える。従来の研究においても二人の関係が普通に夫婦として受け止められているが、晃の出身を考えれば二人の夫婦関係をそのまま字面通りに夫婦として読み取ってしまうと華族子弟なるものの特殊性を見逃してしまうことになる。また、夫婦に対する鏡花の考え方が極めて特色のあるものであることも無視できない。

夫婦、または婚姻に対する鏡花の考え方を言及する時、明治二十八年雑誌「太陽」に発表された談話「愛と婚姻」はよく取り上げられる材料である。「愛と婚姻」では、鏡花が婚姻制度を嫌がる理由は、「社会の婚姻は、愛を束縛して、制圧して、自由を剥奪せむがために造られたる、残絶、酷絶の刑法なりとす」にある。個人の愛に忠実し、純粹たるものであれば、たとえ婚姻制度の枠の外にある「情死、駆落」でも、鏡花は受け入れるという。しかし、社会のため、他人のために作り上げた婚姻は、単なる自由なる愛を束縛するもののほか何もないことを、鏡花は強く主張した。婚姻そのものに疑問を投げかけた鏡花は、「愛と婚姻」を通して、婚姻は国家、親類などいわゆる「社会」のための産物であると規定し、本当の愛を束縛するものだと持論を展開する。婚姻を「酷絶の刑法」にさせてしまう「社会」なるものの内訳とは、「国、親、家、朋友、親属」に対する義務や責任、または孝道などであると、「愛と婚姻」を通して鏡花は主張したのである。<sup>2</sup>

## 3. 大正期の結婚事情と家族力学

鏡花の婚姻に対する考え方を「愛と婚姻」を通し

て確認できるが、このような独特の考え方がどのように「夜叉ヶ池」における晃と百合の夫婦関係と関わるのだろうか、本文にそって検証していきたい。

学円が初めて二人は夫婦であることを知ったのは、彼が琴弾谷に訪れてやっ太行方不明になっていた親友晃と対面できた場面である。そこで、学円は「何は、お里方、親御、御兄弟は？」と、百合の家族のことを聞く。この行動の動機については、二つの理由が想像できる。一つ目は、当時夫婦になること、つまり結婚になることは、親の意向に従うのが一般的であることである。そして二つ目は、華族子弟としての晃のことであろう。

湯沢雍彦氏は『大正期の家族問題——自由と抑圧に生きた人びと——』（ミネルヴァ書房、平成22年5月）において、「夜叉ヶ池」が発表された時、日本社会における結婚の実態について次の見解を示している。

しかし、デモクラシーによる新しい結婚観が声高に叫ばれていても、実際には恋愛による結婚は乏しい時代であった。階層の上下を問わず、異性との出会いの機会は乏しかったし、自分で相手を決めるのは犬畜生と同じで穢らわしいことと否定する空気も強く、親の意向に無条件に従うことが美德との思いが強かったからである。<sup>3</sup>

つまり大正中期になっても「親の意向に従う結婚」が最も主流なものだということが分かる。そうすると、孤児百合の叔父鹿見宅膳は即ち晃と百合の夫婦関係の成立に大きな影を落とす存在になる。事実上、姪の結婚事情について、生殺与奪の権利を叔父に与えている事例は鏡花の過去の作品に既に存在している。また、湯沢氏は国勢調査の資料をもとに、大正九年では婚姻届出の数字は事実上の夫婦の数と乖離していることを指摘している。「簡単に同棲生活に入った男女もあるが、多

くは結婚式を挙げ親族や近隣社会に夫婦として認められた男女の方が多かったであろう」と湯沢は述べている。これは、いわば「夜叉ヶ池」の当時の一般的な夫婦の形であったともいえる。これらのことを踏まえて、晃と百合の夫婦関係を従来の研究通りに、普通に夫婦として扱っていいものなのかは疑問を禁じえない。

二人の夫婦関係の異質さを物語っている場面というと、宅膳が百合を捕まえて雨乞いの儀式を行おうとしている場面と、それに続く晃が百合を助けるために宅膳を始め村人たちと争う場面が特に象徴的である。そこには、宅膳そして村人たちの晃に対する微妙な扱いが浮かび上がる。明治民法、または家父長制によると、夫である晃は百合を財産視する資格が保証されているにもかかわらず、村人も宅膳もほぼ「百合は俺の家内」という晃の主張を無視しているようにみえる。無論、華族という身分を伏せた晃と、孤児とも言える百合が正式的に婚姻届を出すわけではない。それだけでなく、むしろ届出ない方が当時では自然である。しかし、旦那の帰りを待つようにと懇願する百合に、宅膳は「またしても旦那様じゃ。晃、晃と呆れた奴めが」という言葉で交わす。一見、二人の夫婦関係を認めるように見えるだが、そこにはむしろ百合のいう「旦那」といった言葉に対して、冷やかに嘲る態度としても捉えられる。

同じ場面で、晃の「俺の家内」という主張にたいして、宅膳と村人は「村のもの」と「私が姪」で反撃を行う。父兄の承認をもらえない百合と家柄を伏せて暮らす晃は婚姻届出はおろか、「結婚式を挙げ親族や近隣社会に夫婦として認められた男女」という当時では一般的だと考えられている夫婦の形にも当てはまらない。二人は夫婦の枠組みで収容できない特異な夫婦だと言えよう。

そんな中、このような夫婦を夫婦として呼ぶものは、二人の味方である学円と結末部の白雪しかない。このことは、いわば「社会」、または現世において二人の夫婦関係の基盤がいかに脆いもの

なのかを意味するものとして読み取れる。

#### 4. 家を捨てる華族——萩原晃

異質な夫婦関係を構築してしまう根本的な理由の一つとして、晃がいわゆる華族階級に属することが挙げられる。華族というものは即ち1884年華族令によって旧諸侯、旧公卿、または国家に勲功があった者に与えられた世襲の特殊階級のことを指している。小田部雄次は、『華族—近代日本貴族の虚像と実像』（中央公論新社、平成18年3月）において、

同時に、華族は「皇室の藩屏」として規定されることで、天皇の近臣となり、かつ士族、平民に優越する上層の国民階級となったのである。

また、華族は婚姻関係によって皇室との結びつきを強くしていく。

と述べている。華族は、いわば明治維新後、封建的な「家」が近代家族へと次第に変貌していく中、ごく稀な伝統的、封建的な「家」を大事に継続させようとする階級といえるであろう。

一方、このような華族階級は様々な特権を享けながら、制限も少なくない。華族階級には華族令において、明確に義務として負わせるものがいくつかある。酒巻芳男氏の『家族制度の研究——在りし日の華族制度——』（表現社、昭和62年3月）では、華族階級の義務がまとめられている。以下にこのような項目がある。

⑦ 宮内大臣事前認許の願出 有爵者が婚姻、養子縁組、隠居、協議上の離婚若しくは離縁又は家督相続人の指定若しくはその取消を為さんとする時は裁判所に請求する以前に(略)、有爵者の家に入らんとする者の入籍に同意を為さんとする時は有爵者又は其の法定代理人

は該同意を為す以前に、いづれも宮内大臣の認許を受けなければならない。之は将来有爵者になり、或いは礼遇を享くる者となり、襲爵者となる者を生ずるのであるから華族の監督上当然必要な制度である。

即ち、婚姻だけではなく、死亡または行方不明になる場合も宮内大臣に届出する義務が明記されている。この義務の目的は何かというと小田部氏（前掲書）は次のような見解を示している。「華族は、さまざまな特権や身分保証と引き替えに、皇室及び国家への忠誠を誓わされ、「皇室の藩屏」としての役割を担わされていく。それは皇族と華族、華族同士の婚姻関係を重ねることによって、より強固になると思われていた」。規範を破る場合、爵位返上またはマスコミの絶好の獲物になってしまうことになる。これも、晃がかつらを被り、身を隠すことを選ぶ理由の一つであろう。

このように、「夜叉ヶ池」において、結末直前での学円による「種明かし」以前にも、家柄の重みは至る所に匂わせられている。例えば、学円が出会ったばかりの百合に、親友である晃の失踪事件を語る場面でいう、「一時は新聞沙汰、世間で豪い騒ぎした。……自殺か、怪我か、変死かと、果敢ない事に、寄ると触ると、袂を絞って言交わずぞ」は、まさにそうである。新聞沙汰になることは、晃の出自が普通でないことを仄めかすものである。一方、華族のスキャンダルはマスコミ、そして世間の注目を集めるものだという大正時代の風潮を連想させる。また、「親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽くして探した」、「東京の君の内では親御はじめ」、「君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか分からんが、皆先ず御無事じゃ」などのところから、晃がいかに家柄の重荷を背負っていることが窺え、その只ならぬ出自の匂いは早くからテキストに漂っていることがわかる。

「伯爵の萩原」である華族の晃、その失踪は「新聞沙汰」になるほどの話題性があるものだ。従っ

て、親族の立場への学円の気遣いも理解できる。このように、話題性のある華族子弟である以上、晃と百合の結婚が公表にできないものになってしまうことも自然であろう。

作品の中にしばしば見られる、「鐘撞夫」や、「鐘撞弥太兵衛」などの自称が使い分けられている場面もそのことを意味している。「萩原はいざ知らん、越前国三国ヶ嶽の麓、鹿見村琴弾谷の鐘楼守、百合の夫の二代の弥太兵衛は確かに信じる」という言葉通りに、晃は名前も、家も恋のために捨てることにした。晃は家、名前が象徴するいわば、「社会」なるものをすべて手放すことで、自由なる愛を手に入れようとする。「伯爵の三男萩原晃」から「鹿見村琴弾谷の鐘楼守、二代弥太兵衛」に切り替えることによって、晃は百合との間に横たわる「社会」という名目の障碍を乗り越えようとするのではないだろうか。

二人の夫婦関係は一見普通のようなのだが、実はさまざまの難関を越えなければ簡単に成立できないものである。辺鄙な山奥で生まれ育った百合は両親を失い、代理神官である叔父の宅膳に管理される境遇に陥るものである。そんな天涯孤独の小娘を東京に連れ戻ったとしても、華族子弟の結婚相手として相応しいと認められるとは到底思えない。現世における晃と百合の婚姻関係は身を隠しつつ、「琴弾谷」でのみかろうじて成立できるものなのだ。いわば、「恋人たちの危機」はもっぱら百合の不安によるものではなく、晃の存在そのものが琴弾谷での穏やかな暮らしを揺るがすものでありうるのである。

「夜叉ヶ池」で描かれている恋は、すべてをすてようとも成就したい、極端的に言うところ「社会」に背反とも華族の逃避行とも捉えられるものではないだろうか。一見鴛鴦夫婦のように見える二人の夫婦関係は現代といった舞台設定では、一種の禁忌的恋愛にあたる。そして、晃のそのような姿勢も、鏡花の「愛と婚姻」にたいする持論と一致するものでもある。

最後になったが、「二代弥太兵衛」と名乗る晃が意味するもう一つのことを考えてみたい。大竹秀男は「日本近代化始動期の家族法—伝統的家族の動揺—」（『家族史研究』編集会『家族史研究 第4集』、大月書店、昭和56年10月）において、

家は祖先から子孫へ血統の連続により同一性を保持して永遠に存続する超世代的な存在であると観念されて（本稿においてはこの超世代的存在と観念された家を「いえ」と表現する）、「いえ」は同一の父系の血統に属する者により構築されるものであり、「いえ」の同一性は「いえ」を象徴する「家名」の維持によって保持されるものであり、職業及び財産、すなわち「家業」「家産」として祖先より子孫につたえられてゆくものであるという考え方が行われ、それが家族制度の基礎をなしたのである。

と述べている。

晃の「伯爵の三男」から「二代弥太兵衛」への変身は、いわば華族のこうした封建的、伝統的な「いえ」の概念から離脱して、琴弾谷の「家」へと移動することを意味しているように思える。萩原という「家名」放棄して二代弥太兵衛になり、「鐘撞き」という職をも引き受けることになる。まさに華族の家から離脱して、琴弾谷の「家」へと移動するわけである。

この移動によって、「いえ」の中核といえる「同一父系の血統」も否定されることになる。そもそも琴弾谷の「家」の特徴の一つはまさに、血のつながらない家族像だといえる。琴弾谷の家族構成といえば、中核になるのは夫婦である晃と百合であり、その元に太郎坊という人形の子供が存在している。其のほかには、「兄とおなじ人だ」として百合に紹介された学円と、経緯不明だが孤児の百合と一緒に生活している初代弥太兵衛がいる。そのいずれも事実上血が繋がっていない。いわば

極めて独特の家族像である。

## 5. 終わりに

今回の発表では従来看過されている晃の存在に焦点をあてることで、「夜叉ヶ池」の幻想性の元に隠されている当時の社会環境と密接な部分を浮き彫りにさせることを試みた。

大正二年の戯曲である「夜叉ヶ池」の舞台は、山に隔離されている世界ではあるが、「高野聖」のような孤家ではなく、鹿見村という村社会に従属する現代である。そこには、家父長制もあり、華族令もあり、「国、親、家、朋友、親属」に対する義務、責任、または孝道などの束縛も存在している。「愛と婚姻」を通して、鏡花は「国、親、家、朋友、親属」のための婚姻に異論を唱えた。華族が背負う「皇室の藩屏」としての義務は、まさに、「愛と婚姻」で指す「社会」そのものである。

そこで、敢えて夫婦として造形されていく晃と百合の結婚は、「社会」を一切排除した、鏡花の理想的な夫婦の形といえる。晃と百合の関係について、従来の研究では殆ど字面通りに、そのまま夫婦として受け入れたのだが、「夜叉ヶ池」で描かれている夫婦はそうした夫婦と大きな違いが存在している。夫婦の枠組みで収容できない夫婦の形をかりて、鏡花は理想的な純粋な愛を敢えて描いた。「社会」なるものに対する鏡花なりの抵抗、こうした側面は人間の葛藤と家柄という重荷を背負っている萩原晃を解説のコードにして読み解く場合にこそ初めて表面化することができた、もう一つの「夜叉ヶ池」の物語である。物語が幕を閉じる間際、「この新しい鐘ヶ淵は、ご夫婦の住居にしよう」と、白雪姫がいう。そして晃と百合は「顔を見合わせ莞爾と笑む」。愛が束縛され、自由にならない現世での夫婦を乗り越えて、晃と百合は魔界に移行して、「社会」なるものをすべて排除した形で愛で結ばれた夫婦として安住の地を手に入れたのだ。

現世での人間的葛藤と社会なるものの理不尽さは、やがて恋人たちの危機をもたらし、神話的な世界でしか存在していない幻想的大洪水の到来を予告している。そして、現世では死という悲劇を迎えた恋人は幻想的魔界では自由なる愛を獲得する。死は従ってもはや悲劇ではあるまい。「夜叉ヶ池」はこうした幻想劇でしか達成できない結末を有する一方、非幻想的現世の論理も強く機能している。「夜叉ヶ池」という作品における魔界と現世のバランスは、幻想劇の尺度だけでは計れないもののだといえるだろう。

※本文の引用は、岩波版『鏡花全集』に拠った。ルビは適宜に省略した

## 註

<sup>1</sup> 「美しい情愛の倫理は、鐘の伝説にまとわれながら、この二つの世界を貫く軸となっている。《義理》であり《約束》である鐘の伝説は、こうした情愛の内実によって満たされてゆく。そして、恋人たちの危機というかたちでこの情愛の内実が飽和したとき、はじめて恐ろしい大洪水となって運命が起爆する結末部を迎えるのである」と、杉本氏は「夜叉ヶ池」における、この「危機」の働きを指摘している。

<sup>2</sup> 当然のことではあるが、鏡花このような「婚姻観」もさまざまな作品に深く投影されている。わずか一ヶ月後の「外科室」に描かれている医学士と伯爵夫人の愛はまさに一例である。「外科室」には、「其時の二人が状、恰も二人の身边には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきが如くなりし」との言葉が見られる。「愛と婚姻」では、「自由なる愛」を束縛する婚姻を社会のためのものと定義し、その「社会」なるものを「国、親、家、朋友、親属」への義理や責任などと規定する。「外科室」における、医学士と伯爵夫人、二人の間に横たわる溝は、まさに「愛と婚姻」のいう「社会」と共通するものである。

また、明治四十年に発表された「婦系図」も一例として挙げられる。この作品においては、「人間性を無視した一家一門主義」との対決という反社会的主題をとおして、「愛と婚姻」のテーマを強調する」というところはすでに指摘されている。

<sup>3</sup> 同書では、「人口問題研究所の調査によると最も古い結婚動機の調査は昭和五～十四年に結婚した夫婦についてのものだが、そのとき恋愛で結ばれたと答えた夫婦は十三%に過ぎなかった。いわんや、その二〇年前の大正中期では、恋愛は一〇%もなかったであろう」と指摘されている。

**参考文献**

- 村松定孝『泉鏡花研究』（冬樹社、昭和49年8月）  
笠原伸夫「天守物語の成立」（『国文学解釈と鑑賞』、昭和50年9月）  
杉本優「泉鏡花の幻想劇——「夜叉ヶ池」の復権」（『国語と国文学』、昭和56年8月）  
森井マスミ「「夜叉ヶ池」再読」（泉鏡花研究会『論集 泉鏡花 第五集』、和泉書院、平成23年9月）  
大竹秀男「日本近代化始動期の家族法—伝統的家族の動揺—」（『家族史研究』編集会『家族史研究 第4集』、大月書店、昭和56年10月）  
酒巻芳男『家族制度の研究——在りし日の華族制度——』（表現社、昭和62年3月）  
小田部雄次『華族—近代日本貴族の虚像と実像』（中央公論新社、平成18年3月）  
湯沢雍彦『大正期の家族問題——自由と抑圧に生きた人びと——』（ミネルヴァ書房、平成22年5月）